



STEP BY STEP

「裁判所の指摘を重く受け止め、真摯に反省しています」と言われても…。

無罪判決が続いています。裁判所の開示命令によって提示された新証拠が無実の扉を開いています。しかし、新証拠というより事件当初に既に存在していた証拠ですから、警察・検察が意図的に隠していた証拠に他なりません。度々議論されていることですが、警察や検察は国民の税金で活動している訳ですから、彼らが隠している証拠も国民の財産と言えます。それを隠して無辜の人を罪人に仕立て上げるなど言語道断。

袴田事件では「5点の衣類」と呼ばれる、血痕のついた味噌漬けの着衣のカラー写真が出てきたことから、証拠の捏造が明らかになりました。福井女子中学生事件では、「事件当日に血の付いた前川を見た」という知人の証言が、自分自身の罪を軽くしてもらうための虚偽だったこと、その見返りとして警察から金品を受け取っていたことなどが明らかになりました。また歌番組で「吉川晃司とアンルイスがいやらしい踊りをしていた」という証言も犯行日を決定づけるものとして証拠採用されましたが、その「いやらしい踊り」は事件の翌週であったことが明らかになりました。検察はそれを知りながら隠していたのです。

台湾では、証拠は第三者機関が管理し、被疑者でさえ自由に証拠を閲覧できます。冤罪を作ってはいけないという決意のもとに、裁判所、検察庁、警察、弁護士会が団結して作ったシステムです。どうして日本ではこれができないのでしょうか。

しっかりと総括して反省しない姿勢がその大きな一因であることは間違いありません。複数の事件で県警本部長が謝罪する場面がニュースになっています。しかし、心が伴わない形だけの謝罪です。袴田事件の弁護団が（袴田さんを犯人視するような）検事総長の見解を名誉棄損であるとして、国を提訴しました。これだけ不祥事が続く警察・検察を信用しろと言う方が無理です。

（事務局/なつし聡）

「人質司法」廃止のために闘う①

角川歴彦（元KADOKAWA会長）

今年2025年は、私の父角川源義が1945年の敗戦直後にKADOKAWAの前身の角川書店を創業し80年にあたります。1943年生まれの際は、角川書店の歩みとともに人生を過ごしてきました。創業者である父の源義、兄の春樹に続き、1993年に社長に就任してからは、まさにKADOKAWAという会社の発展だけに心を砕いてきたと思います。そんな僕にとっては、2022年9月五輪汚職をめぐり無実の罪で逮捕されたことはまさに青天の霹靂でした。この事件は、利権が渦巻く「東京五輪の闇」に迫るものとして注目されましたが、僕にとっては日本の「刑事司法の闇」に突き落とされる極限の体験となりました。

僕は、逮捕直後から一貫して無実を訴えています。無実を訴えたことで、4回も保釈請求は認められず（後述のとおり、4回目は勾留執行停止中だったので取り下げた）、同じ五輪汚職事件で逮捕された15人の中でもっとも長い226日間、東京拘置所に勾留されました。その間、3度倒れ2度の入院をし、拘置所内で蔓延したコロナにも感染しました。無実を主張したため僕は、嘘の供述をしてでも罪を認めなければ保釈されない「人質司法」の犠牲者となったのです。

何度目かに倒れたときに医務室の担当者に思わず不安を漏らすと「角川さん、あなたは生きている間にはここから出られませんよ。死なないと出られないんです」と告げられました。



錚々たる顔ぶれが並ぶ「角川人質司法違憲訴訟」弁護団

怒りとともに心底ぞつとするような恐怖を覚えました。生涯この時ほど死の恐怖を間近に感じたことはありません。

そして瀕死の状態の中で申請した4回目の保釈請求は、あまりにも健康状態が悪かったために既に勾留執行停止中だったこともあって取り下げざるを得ませんでした。僕は、無罪を主張して裁判を闘おうと取り調べ調書に一度もサインをしなかったのですが、5回目の保釈申請の際に弁護団は僕の身体の状態を鑑みて、多くの検察官請求証拠の証拠調べに同意しました。当時は命の危険と隣り合わせだったので、妥協するより他方法はなかったのですが、体力が戻った今となっては、悔しい気持ちがしています。

そして保釈から1年余が過ぎた、2024年6月に僕は、「人質司法」違憲訴訟という国家賠償請求訴訟を起こしました。この裁判の被告は国で、「検察」と「裁判官」を訴えています。弁護団との議論の中では「保釈を決定するのは裁判所であるから裁判所だけを訴えてはどうか」という意見もありましたが、結局「検察官は3割、裁判所を7割」で問題にするということになりました。五輪事件の刑事裁判と並行して進めているこの裁判を僕は「人権裁判」と呼んでいます。この裁判を起こすに至ったのは、僕自身が不当な勾留により生死をさまよったこと、そして何より一番大きかったのは大川原化工機事件の「冤罪」で命を落とした相嶋静夫さんの存在があったからです。

一方で、「自白をしてしまった者の悲しみ」を思うこともあります。最近ある刑務所から僕に届いた一通の手紙には、このようなことが書かれていました。「角川さんは人間が強く耐えて、自白をしなかった。だけど嘘の自白した者には、自白した者の悲しさがあるんです」。この手紙を読んで、相嶋さんのように亡くなってしまった人、自白した人、それぞれに過酷な理不尽なことを強いるのが「人質司法」なのだという事に改めて気がつかされたのです。(つづく)(角川歴彦)

「支配からの解放」 やすひろ 小椋康裕

皆さん、こんにちは。小椋康裕と申します。2020年7月に強制性交罪等で逮捕・実名報道され、懲役4年(求刑5年)の判決を受け、最高裁まで争いましたが覆らず、2022年11月より喜連川社会復帰促進センター(栃木)にて受刑生活を送っております。私は保釈されている間に自力で再審請求を申し立てました。その突破口は刑事による証拠捏造です。現在は第2次再審請求中であり、最高裁に異議申し立てを行い、回答を待っている状態です。

事務局長のなつしさんとは受刑前にネットで繋がっており、メッセージャーでやり取りさせていただいていました。私は、受刑開始後すぐにでも再審が開始されると高をくくっていたのですが、一向に進まず、日弁連人権擁護委員会に救済申請をしている際、「21世紀の再審」という本で当会の存在を知り、手紙を出したところ返事いただき、「あー！ なつしさんだ」と驚き、現在に至っています。

今回、コラムのスペースをいただくのは、冤罪犠牲者の会との心温まる文通の中で「狭山事件は部落問題と切り離せない」ことを知り、私の関西での経験を書いたところ、コラム執筆のお話をいただいた次第です。

2000年の出来事です。私は大阪の専門商社で働いていました。ある日、「総務のKさん(当時55才、男性)の仕事は部落解放運動に参加することであり、集会に出席し社長あてにレポートを提出したり、部落解放のための全国を飛び回ることが彼の仕事である」ということを知ったのです。私は「はああ～？ なんですよ！？」と驚愕したのであります。部落差別の象徴とも言える差別的な言葉を社会科の授業で教わったのが1985年中3のとき。関西は関東に比べて差別や階級社会の考えが多く残っています。2000年になっても差別や偏見は残っていて、部落解放の専従者が会社内にいるなんて、なんて遅れているんだろうと思ったものです。

タイトルの「支配からの解放」について。私は2年10ヶ月、塙の中で国家権力に支配される生活を余儀なくされています。2023年11月に始まった「さん付け」(以前は呼び捨て…失礼だろ！)や6月施行の「拘禁刑」で少しずつ処遇はマイルドになってきてはいます。しかし、刑務官は相変わらず(どーでも良い)細かいことをあげつらい、ドヤしてきます。21時就寝。読書も出来ず朝陽を待つしかない夜。手紙は月5通。ボールペンの替え芯は月1本購入可能。部屋を出れば右向け、左向け、わき見するな、工場の知り合いとすれ違っても挨拶するな、等々。「これって再犯防止に役立ってい

このように、立場の強い者が弱者の生存権や自由を脅かすことが許される現実を体験し、「どうせ勝てないから」と闘うことを諦めてしまった同僚に会うたび、「理不尽な権力に對抗し、この人たちを救わなくては!」と思うのです。私は2026年に釈放された後は札幌に住む予定です。司法試験に合格し、弁護士資格を取り、冤罪犠牲者、特に塀の中の仲間を一人でも多く救出することが目標です。

■ 今月の一首 ■

赤レンガを通り抜け 見渡す限り行き止まり
 かりたい 帰りたい
 空を見上げて ふるさとを 寂しさ堪え 塙の中

小なりな部屋の片隅で カレンダー見て溜息を
戻りたいたい 息苦しくて 塙の中

重厚な佇まいの千葉刑務所正門



SBS症候群という言葉聞いたことがありますでしょうか。赤ちゃんを激しく揺さぶることで脳に重い障害が残る、ときには命に関わる症状が起こることもある、というもの。そして冤罪が起こりやすいという一面も持っています。赤ちゃんに何かあったときに、医師が虐待の可能性を指摘すると、たちまち事件になってしまうという恐ろしさがあり、関西ではそんな事例が相次いでいます。事故なのか、事件なのか。信じるのが先か、疑うのが先か。関西テレビの企業内弁護士だった上田大輔監督が問いかけます。

「塀の中の白い花～ほんとに何もやってません」では上田監督へのインタビューを放送しています。YouTubeで視聴する場合はコチラ
→ <https://youtu.be/mEhto2JGw0>



堀の中の白い花～ほんとに何もやってません

[illegible]

■日本で唯一の冤罪ラジオ番組「塀の中の白い花～ほんとに何もやってません」が番組延長のためクラウドファンディング再開！

冤罪に巻き込まれたら、家族にも会えない、友人にも会えない、極限状態に放り込まれます。人生も夢も自由も奪い取られてしまうことになります。残念ながらそんな冤罪が日本中で後を絶ちません。この番組は、冤罪が遠い世界のことでなく、誰の身にも起こりうる身近な問題であることをお伝えし、一緒に考えていただくきっかけになることを目指している番組です。

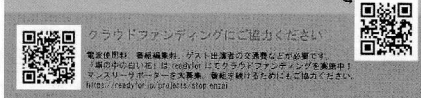
クラウドファンディングが苦手という方はお振込みによる支援も可能です。

西京信用金庫 保谷（ほうや）支店 普通2140090

日座名：アルファミュージックデザイン



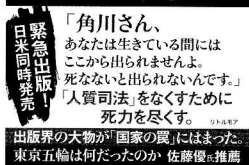
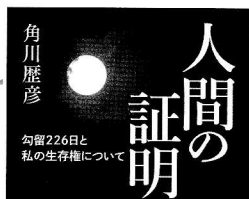
当番組が海外メディアで紹介されました。日本の「人質司法」を海外に紹介する非常に濃い内容の番組になっています。このドキュメンタリーが「カンヌ・コーポレート・メディア&TVアワード2022」の政治問題ドキュメンタリー部門の最高賞、金イルカ賞を受賞しました。是非ご視聴ください。



■今月のオススメ■

人間の証明 勾留226日と私の生存権について
角川歴彦著

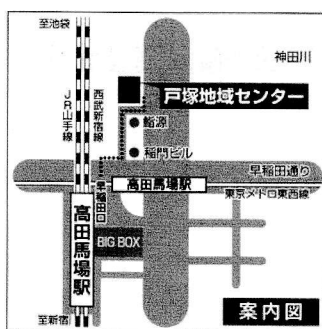
「角川さん、あなたは生きている間にはここから出られませんよ。死なないと出られないんです。」
人質司法をなくすために死力を尽くす。
出版界の巨物が「国家の罠」にはまった。
東京五輪は何だったのか。佐藤優氏推薦
リトルモア 定価1200円（税別）



■第1回定例勉強会のお知らせ■

再審法改正がヤマ場を迎えています。冤罪犠牲者の会ではこれまで行ってきた大きなイベントよりも、小さな勉強会を定期的開催していこうと考えています。毎回前半はテーマに沿って勉強し、後半の時間は会員同士が繋がれるような交流の場にしたいと思います。時には関西でも開催する予定です。まずは第1回め。東京に近い方は是非ご参加ください。

参加ご希望の方は下記にメールをください。
satoshinatsushi@gmail.com



日時：10月13日（祝）
13:30～16:30
講師：生江尚司
（国民救援会三多摩総支部）
「再審法改正の現状」
会場：戸塚地域センター
5F会議室1
住所：東京都新宿区高
田馬場2丁目18番1号
TEL. 03-3209-8001

■冤罪犠牲者の会は当会の主旨に賛同していただける仲間を集めています！■

「冤罪犠牲者の会」が結成されたのが2019年3月2日。お陰様で少しずつ会員が増え、現在、290名を超えました。冤罪に巻き込まれてしまい、闘っている人、再審を目指している人、無罪を勝ち取った人が約50名、獄中で無実を叫んでいる人が約30名、近親者・支援者が約210名で構成されています。冤罪撲滅に力を貸してくださる方を募集中です。冤罪に関心をお持ちの方がお近くにいらっしゃったら是非、声をかけてあげてください。

年会費：個人会員（正会員）2000円 / 賛助会員1000円

「冤罪犠牲者の会」の口座

◎現金払込・ゆうちょ間送金の場合

記号番号 00150-7-515181

口座名称 冤罪犠牲者の会

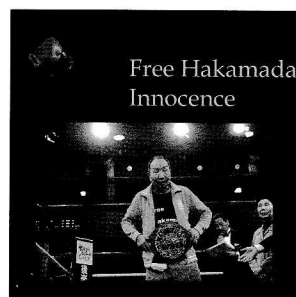
◎他行からの送金の場合

金融機関 ゆうちょ銀行（金融機関コード 9900）

支店 ○一八 店（ゼロイチハチ店）店番 018

預金種目 普通 口座番号 9884160

口座名義 エンザイセイシヤノカイ



■CD「Free Hakamada」発売中！

Amazonや全国のCDショップでご注文できます。売上は冤罪撲滅を目指す支援団体に寄付します。

◎昨年5月末で西新宿にありました桜井司法研究所は閉鎖しました。当面の連絡先は下記四角内の私書箱が当会の宛先となります。冤罪犠牲者の会の常駐スタッフはおりません。

お急ぎの場合は080-5182-3911（なつし聡）へご連絡ください。

◎PayPalでの会費納入は利用者が少ないため、今後はゆうちょ銀行への振込のみとさせていただきます。

発行：冤罪犠牲者の会

〒160-0022 新宿区新宿4-1-22 新宿コムロビル私書箱702号

<https://enzai.org/> e-mail: info@enzai.org

発行責任者：なつし聡